その概況は左の如くである

(イ)準備調査

第一次通信調査　約　八〇通　四月中旬～五月中旬

第二次〃　〃　約二〇〇通　五月中旬～六月中旬

招致調査　二名　五月三十八日

(ロ)合同調査

出頭人員　二十一名（招致人員四二名出頭率五〇％）　六月二十八～九日

(ハ)補備調査

通信調査　約　五〇通　七月上旬

招致調査　一名　七月十七日

尚合同調査及招致調査時の出頭者名簿は別紙第一の通り

其の二　細部狀況について

(イ)編成機構

東邊道支社は元の東邊道開發株式會社で昭和十八年四月滿洲製鐵株式會社に合併せられ從業員約三万名その中日本人は約二九〇〇名で通化市二道江に支社があり鐵廠子、七道江、大栗子、石人、松湯、杉松崗等通化省内各地に九箇の鑛業所（採鑛、採炭所）を有してゐた

職制の細部及各採炭所の位置要圖は別紙第二、第三の通りである

(ロ)應召（入隊）狀況

イ、重工業関係者は技術者が多い関係から一般に入隊延期、應召除外等の處置をとられてゐた爲昭和十九年迄は應召（入隊）者は僅少で昭和二十年に入り逐次活潑となり從業員の約二〇％内外が應召した模様である

2、應召狀況を時期別に見ると左の様に分れるが昭和二十年五月が最も多く該支社関係未復員者の大部は此の時期の入隊者である

昭一九、　現役入隊者（青年隊員）

昭二〇、一月～三月　青年者多く東、北滿國境方面へ入隊

〃　五月～六月　〃

〃　七月　壯年者多く通化周邊部隊へ入隊

〃　八月　〃

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

尚七、八月頃入除人員は終戦後その大部が除除し會社に復歸してゐる

3. 調査の結果判明せる應召（入除）者は別冊連名簿の通りである

應召（入除）者は各鑛業（採鑛、採炭）所については殆んど大部を掌握し得たが二道江支社については部課の数多くその各々につき調査出來なかつた爲把握したのはその一部に過ぎない

4. 昭和二十年八月終戦直前男子職員の約九割は防衛召集の爲各居住地に於て應召したが終戦直後夫々除除復社した

5. 好資料保有者

中野　勇（二道江青校教官）
板橋　勇太郎（〃　〃）
矢橋　駿雄（人事課長）
小島　五十馬（五道江兵事係）
高村　榮蔵（八寶兵事係）
吉村　朝一（大栗子在郷軍人分會長）
黒岩　巳年（〃　在郷軍人関係）
佐藤　春四（〃　兵事係）
花田　次雄（〃　庶務係）
三浦　信一郎（〃　青年隊長）
中溝　正寅（鐵廠子人事係）
荻谷　八十吉（〃　兵事係）
小野　定一（七道　兵事係）
田中　國守（〃　人事係）
栗林　鐵男（〃　副所長）
片山　透（杉松溝）
田中　盛綱（〃）

(註) 住所は別冊資料保有者連名簿にあり

(四) 引揚流動狀況

終戦後内地歸還迄昭二、三、三の通化事件以外は殆んど事故らしいものもなく概ね齊整と行動してゐるが若干期間中共ヤ國府兩軍の

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

交戰地となつた爲中共軍撤退時に技術者及一部病院関係者は北。東滿及北鮮方面に進行せられ相當の人員がそのまゝ流用殘留せしめられてゐる又軍人の混入も若干あるが一般邦人引揚時に歸還してゐる各地區の細部狀況は左記の如く行動群を大別すると二道江、大栗子、若潟、煙筒溝、杉松崗、石人溝、八賓、饑廠子、七道江及五道江の四群となる

人員變動狀況要圖別紙第四の通り

(1) 二道江區について

1. 昭20.8.上（6.7）白城子軍馬補充馬廠の軍人（約十名）、軍屬とその家族及白城子市民計約二〇〇〇名が流入して來た

事情詳知者 長谷川廣 高橋

2. 昭20.8.19 ソ軍進駐 新潟縣西蒲原郡月潟村

3. 昭20.8.下 高知縣高岡郡吾桑村

二道江、通化部隊の除除、逃亡兵約一五〇名が混入して來たので社宅に收容した

4. 昭20.9.下 チャハル方面の部隊より軍人五名が流入して來た

5. 昭20.9.下 治安不良の爲中國人機關「通化地區暫定治安維持會」と接渉し假接收の形で主任金亞澤に引繼ぐことゝし十月上旬引繼を完了す（「通化煤鑛公司」と稱す）

6. 昭20.10.上 八路正規軍來る

7. 昭20.10.15 煙筒溝地區より大栗子、松濱、煙筒溝の社員及家族が移動して來たその人員は約二、五〇〇名である尚これと前後して杉松崗からも社員及その家族約五〇名が來た當時二道江にゐた社員及家族數は約二、五〇〇名であるから前記白城子の人員を合して合計約七〇〇〇名となる

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

8. 昭20.10.30 ソ軍引揚ぐ

9. 昭20.12. 會社は東北人民軍軍事工業部に接收さる鑛山機関は鑛務局、機械工場は軍事工業部の兵工廠となり日本人は殆ど各機関で働いた

10. 昭21.2.3 通化事件（後記）

11. 昭21.2.9 通化事件被逮捕者釋放

12. 昭21.4月～7月 技術群數次に分れて北滿、北鮮方面に送出流用さる（細部後記）

13. 昭21.9.3 内地歸還の爲計畫遣送開始せられ三梯團（一梯團約二〇〇〇名）に分れて出發二道江地區集結人員の約九五%を終了した引揚經路は通化～奉天～胡芦島で途中奉天及錦縣に各十日宛滯在してゐる

14. 昭21.10.下 中共軍は國府軍に壓されて退却し通化、二道江地帶は交戰地となるその際殘留人員中の大部（約二五〇名で工作工場作業員が主力）は中共軍の爲大栗子、臨江地區に連行さる 尙中共軍は撤退に方り發電所及鐵橋等を爆破した

15. 昭22.3.13 殘留者全員（九二名）は二道江より通化市へ脱出22.4.12通化出發國府軍專用トラックにて奉天に到り胡芦島經由歸還す

(註) 牧俊夫（林業部長）根北常彦（大栗子所長）三橋健兒（工作工場長）等が含まれてゐる

16. 好資料保有者

渡邊通業（光建設副局長） 高木勝義（總務課長）

島田光（民會長） 吉村春雄（工作員）

金田清（工作員） 三橋健兒（工作工場長）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

大沼智太郎（白城子・二道江引卒者兵長）
（山形縣北村山群戸澤村白島）

17. 二道江支社の建造物及人員の收容要圖別紙第五の通り

(4) 各地區について

大栗子

1. 昭20.8.13 滿洲國皇帝一行大栗子に移動し來る
一行は（滿洲國高官、日本軍將官若干、宮内府関係者約五〇名 滿軍憲兵、日本軍憲兵約三〇名）で8.16 皇帝及高官は通化市に移動しその他は殘留して居たが逐次分散した
又終戰直後數名の軍人混入す（歩二七五連吉田義雄軍曹等）

2. 昭20.9.20 暴民の襲撃を受け所持品を略奪され在留日本人は全部臨江經由煙筒溝に避難す
大栗子在留日本人員數は左の通り

鑛業所職員及家族	一〇〇（三五〇）〜一五〇
滿鐵及警護隊関係	一三
鴨綠江製材會社〃	五〇
市民	約六〇〇
計	

爾後煙筒溝に約三週間滯在し20.10.15二道江（雲雀台・鶯台）に移動した

3. 資料保有者
東實　加藤政雄　奥谷實　登坂猪四郎（混入軍人の狀況）

4. 大栗子鑛業所附近の略圖別紙第六の通り

煙筒溝

1. 軍人軍屬の混入は終戰後約二十名である
長谷川光雄（茨城縣那河郡大宮町）はその中の一人

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

2. 昭20.9.下
大栗子・松濤・臨江地區より暴民の襲撃を受けた社員を主とした邦人移動し來る北の内臨江地區のものは約二〇名である
3. 昭20.10.中
前項各鑛業所より集つた人員を合し約二五〇名二道江（玉花台及朝日台に收容）に移動す此の際通化市へ直行せるものは約一〇〇名である
4. 臨江憲兵隊より内藤太一とその家族が來たが殘留せる筈

松濤

1. 軍人は20.8下約二十八名が混入した
内譯……牡丹江部隊（六名）東寧航空部隊（一八名）
憲兵（四名）谷本軍曹・布田伍長・湯川伍長（中江鎮）（林口）（朝鮮）
2. 昭20.9.下
暴民の襲撃に遭ひ煙筒溝に移動す人員約二五〇名
3. 二道江集結後は旭台に收容さる
4. 好資料保有者
石本 徹（第1項軍人関係）

杉松崗

1. 他からの流入は全くない
2. 終戰後社員及家族の大部は朝陽鎮に至り約三箇月滯在し昭21.10.上二道江地區に移動、した人員約五〇名で一部通化に赴いたものあり
3. 資料保有者
田中秋廣　片山 透　樽井秀三郎

五道江

1. 終戰後松濤地區より約五〇名移動し來る此の中には一部の軍人が含まれてゐる一般に治安よく採炭に從事した
2. 昭21.9.3頃人員の大部（約四〇〇名）は五道江出發奉天・錦縣・胡芦島經由歸還す

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

3.殘留者所長以下約三五名は22.12.13歸還すその後の留用殘留者皆無の筈

4.軍人の混入者は約二六名でハルビン及チャムスの航空隊員である　八名は別紙第十一の通り

5.五道江採炭所附近の略圖別紙第七の通り

石人及八賓

1.昭20.8.16牡丹江の菊地部隊（歩二七九連）及纐纈部隊（牡丹江重砲連）の軍人數名及同家族を主体とせる約八〇〇名が石人に移動し來る

註、引卒者：宮内義人少尉（曹長）死亡
金子榮一（北海道小樽市砂[illegible]町八六）
長谷川正德（愛知縣葉栗郡草井村村久野）　歸還

2.昭20.9.18石人社員は暴民の襲撃を受けて略奪に合ひ爾後は學校及寺に收容さる翌9.19八賓も同樣襲撃を受く

3.昭20.10.中八賓社員及同家族は石人に移動し合流す（石人に於ける民會長は大場傳治郎藤田參謀長森本近藤枝村榮の諸氏である）

他方面よりの人員を合し邦人約一、六〇〇名（石人五〇〇、八賓三〇〇、市民一〇〇、軍人及その家族八〇〇）となる

4.石人及八賓駐屯部隊の加藤榮一准尉以下約三〇名の軍人が混入した

（註）石人部隊は大江少佐を長とする歩兵一中隊、工兵一小隊であり前記加藤准尉以下は討畫遣送により全員歸還してゐる

5.藤田參謀、渡邊忠三獸醫中佐（一二五師獸醫部長）及その家族、自動車運轉手が移動して來た

（註）藤田參謀以外は全部歸國してゐる

6.昭21.9.4石人出發約一、〇〇〇名は道化→奉天→胡芦島經由歸還す

7.昭22.4殘留社員約五〇名は留用の八名を除き北鮮→平壤→佐世保經由歸還す

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

8. 好資料保有者
高村榮蔵（八寶人事係）
枝村　榮（民會長）
9. 石人溝鑛業所附近の略圖別紙第八の通り

鐵廠子

1. 終戰時の在住者は鐵廠採炭所約三〇〇名（含家族）鐵廠分院及銑鐵工場約一五〇～二〇〇名（含家族）一般住民約三〇名計約五〇〇名で全部會社社宅及寮に收容した
2. 昭20.8. 末通化憲兵隊上田軍曹以下十名逃亡して來たが上田軍曹以下五名は七道江及石人に移動し左記四名のみを收容した
兵長　中島達雄（[redacted]）
軍曹　大吉　滿（[redacted]）
兵長　田中　正（[redacted]）
兵長　伊賀四郎（[redacted]）
3. 昭20.8.下（9上？）横田軍醫少尉以下約十名來り收容す之等人員も全部歸還せる筈、判明してゐるのは左記二名のみ
少尉　横田　〇〇（[redacted]）
上等兵　伊藤吉之助（[redacted]）
4. 昭20.9. 上暴民の襲撃をうく又鴨園駐屯部隊（補給部？）の上枝軍曹等四名流入す
5. 昭21.1.（？）灣溝より社員及その家族約五〇名來る
6. 昭21.2. 中七道江より約一〇〇名の社員及その家族移動し來る
又昭21.9.6 七道江より約三〇〇名遣送の爲來り合流す
7. 昭21.9.8 七道江採鑛所関係者を合し計約一、〇〇〇名歸還の爲出發通化に於て更に約四五〇名を合し通化第十五大隊として奉天、胡芦島經由歸國す
8. 鐵廠子採炭所附近の略圖別紙第九の通り

七道江

1. 終戰時の人員は家族及社外の人員も合し約四二〇名あり昭21.2中1昭21.3.下の間に四回に分れ合計約一〇〇名が鐵廠に又昭21.4.1昭21.8.の間に約三〇名が二道江に移動す

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

2.軍人で混入して來たのは昭20.9.通化憲兵隊員四名及他一名のみである

その人名左の通り

通化憲兵隊　上田武司（[redacted]）

〃　相馬清（[redacted]）

〃　長澤猛（[redacted]）

〃　瀧澤一雄（[redacted]）

部隊不明　尾崎金作（[redacted]）

3.昭21.9.6内地歸還の爲全員（約三〇三名）鐵廠子に移動鐵廠子社員と行動を共にした

4.七道江採鑛所附近の略圖　別紙第十の通り

(ハ)資料概況表の補正資料

1.通化周邊部隊は總て昭20.8.下吉林地區に集結を命ぜられ移動した從而概況表にあるが如き昭21.6.21興城陸病二〇〇名が二道江に來た事實は認められない

2.計畫遣送は大連經由でなく通化地區は全部奉天↑胡芦島經由である又昭23.5.29通化より奉天へ移動した資料あるもとれは昭22.4.12の殘留梯團と解せられる

3.鴨園の糧秣倉庫武裝部隊約一中隊は昭20.9.下朝鮮方面へ移動した

(ロ)死亡事象とその狀況

前述せる通り通化事件以外には特別の事件なく該事件にも直接的關連がなかつた爲死亡者は一般に少く傳染病による子供がその大部を占めてゐる以下各地區の細部について概述する

(イ)二道江地區

1.通化事件以外に特別な事件はなく死亡者は約四〇〇名でその大部分は20.11.末～21.初間に於ける子供の病死者（傳染病）である

此の中遺骨は約六〇～七〇柱は遺族が持歸つた筈で墓地は要圖（別紙第五）の通りである

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

2. 昭20.9.14配給所にて臨時保安隊員により左の二名射殺さる
阿部・竹村（名簿整理す）
3. 引揚間の死亡者は三名で奉天・錦縣・博多各一名である
4. 通化事件関係死亡者については後記す

(ロ) 各地區の狀況

○大栗子……煙筒溝に於て約十名病死（老人及子供）す
○松　溝……暴動により二名病氣にて三名計五名死亡す
○煙筒溝……病死者約二十名あり
○杉松崗……病死一名
○五道江……病死者十名で子供が大部・又引揚船中三名死亡す
○石人溝及八寶
1. 昭20.9.18及19暴民の襲撃により四名の死亡者を出す
石人三名（社員・遠藤榮・一ノ瀬直太及軍人一名）
八寶一名（一色警尉）
軍人は阿部茂成（[redacted]）
承知の筈
2. 民主裁判（昭21.1）により三名射殺さる
軍人・高橋某及東北人（氏名不明）
社員・酒　井健次郎（採掘主任・佐賀か長崎）
長谷川正德（[redacted]）承知の筈
3. 飛行機事故（練習機墜落死）により淺間勘太郎（豫科練出身）死亡
4. 牡丹江より移動して來た宮内義人實長昭21.2看殺
5. 病死者約二〇〇～三〇〇名あり大部は子供である
又引揚間も約二三名死亡者あり
鐵廠子……昭20.9.上暴動により一名（村田秀介）撲殺さる
その他病死者約十名あり
七道江……病死者四名のみ（田中・海老名・竹野・本間）

(ハ) 通化事件

1. 通化市内に出張所等皆無であつた爲該事件に直接関係せるもの

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

なく延道江、石人、鐵嚴等では容疑者として若干名が逮捕抑留され通化に連行されたが間もなく釋放せられた但し此の抑留、連行等間に二三事故あり死亡者若干を出してある

從而該事件に関しては直接的な好資料はなかつたが約三〇〇名の資料保有者を掌握した

2. 事件に関連せる死亡事象等は左の通りである

A、二道江地區

(イ)逮捕されたものは約四〇〇名でその中軍人を主とした一八五名が通化市に送られ省公署の刑務署に留置された此の人員は昭24.2.17十名を除き釋放せられたが此の十名の中に含まれた病院長梅田良雄氏は昭24.3.31病死し下赤溶雄氏（光經理部長）はそのまゝ歸らず狀況不明である

(ロ)二道江では前項四〇〇名を三箇所に拘禁した此の間の死亡者は左の通り

○岡本春郎　24.2.6　射殺

○田代正利
賀來榮
熊野始助　24.2.7　射殺

○某　軍曹　小學校に於て逃亡を企圖し射殺さる

○牧林業部長他六名小學校にて訊問をうけ牧氏を除き他全員射殺さる

○軍人中高倉及佐々木兩名は射殺された通化附近の部隊と思ふ（西中日出夫氏提供）

○松本某、橋口某（資材課）も殺された（加藤政雄氏提供）

○松澤関係の寺村春喜、立石厚兩氏は釋放された事を聞かず死亡したらしい（八木喜七氏提供）

B、その他の地區

五道江、死亡者一名のみ

石人溝、抑約三〇名が通化市へ連行せられたが全員釋放せられた

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(ハ)前項連行時に左の三名の死亡者を出した
軍人　一名氏名不詳
社長　磯邊恒一射殺
市民　元村　某（貝塚市出身）射殺
尚副縣長河内亮（長崎縣？）及通化副市長某氏は
安東へ送られる途中で殺された
鐵廠子＝昭2.2.7より富田豊吉氏・織田好太郎氏及福田某氏
等は通化　市へ送られたが釋放された

3. 資料保有者
(イ)大阪通化會長松尾庄二氏より通化會名簿（三三一名分）を別
冊の通り掌握す
(ロ)會社關係者中の資料保有者と思はれるもの左の通り
三橋俊兒（工作工場長）　島田光（民會長）
吉村朝一・本田三郎（運輸關係）・織田好太郎（通譯）
山田敏夫（王道）
その他前記の通化市へ連行された者
註　直接的關係者でないから深くは誰も承知してゐない筈
(ハ)該事件調査の爲には左の人々につき調査する必要あり
○滿洲中央銀行通化支店關係者
○滿洲興業銀行通化支店〃
○松江省官吏
　　有力なる人が必ずゐる筈
　紀野重仁（省公署官吏・現小倉製鋼東京本社勤務）
○民會の幹部：九鬼・天野・野村氏等
　尚野村氏は航空兵大尉で本籍は新潟縣
○櫛渡敏雄（王道江郵便局委任官試補）
　佐賀縣杵島郡西川登村大字小田志字扇尾
〃大阪通化會長松尾庄二氏提供資料左の通り
(イ)西線飛基幹航空隊（林部隊）の中半數は優遇されて留用・殘
りの半數は歸國された
(ロ)職工隊は全員虐殺された（約五〇名）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(ハ)病院の柴田大尉は撫順にて逮捕され通化へ連行されてからは不明であるが恐らく殺害されたと思う

(ニ)好資料保有者

豐岡　一　増田松夫　石井總十郎　傳田和雄
高遠貞三（通化地區引揚者名簿所持）　久我　深
式本米太郎　藤田駒吉　海老谷　繁　駒井二三
熊谷藤一郎　泉　竹之助　大谷　實　五十嵐千多吉
橋本　泰　下里太郎　谷村正嗣

右の住所は全部名簿中にあり豐岡氏の住所は藤井榮子（[redacted]）に聞けばわかる筈

又既把握の幹部中尾花、傳田、熊谷藤一郎、樋口幸三郎、半田猛、豐岡少尉、松倉等は歸還してある

(ホ)留用殘留狀況

イ、技術者の留用群數百名が數次に分れて東、北滿或は北鮮に出發して居り一部の歸還者はあり本人からの來信もある樣であるがその後更に數群に分れ或は各地區を轉々移動してある等の爲此の調査は相當困難である

各地區の細部狀況は左の通り

2、二道江地區

(イ)昭21.9.社員二三名（家族を含め四〇名）は通化ー吉林ー延吉ー圖們ー北鮮ー琿春と移動し中共軍軍事工業部琿春炭鑛公司に留用さる

未歸還者及歸還者氏名の判明せるもの左の通り

(未)者

戸二郎　倉田長成　村橋阪太　都築堅太郎
實近國治　伊藤一郎　山本丈平　村島猶雄
濱畑鐵雄　瀧口一良

(歸)者（琿春ー圖們ー奉天ー胡蘆島經由21.9の遣送時十二名歸還）

東　實　[redacted]
山崎直延　[redacted]

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

杉本信太郎（[redacted]）
齋藤孝吉（[redacted]）
石川賢三郎（[redacted]）
古河原三平（[redacted]）
有馬義明（[redacted]）
宮浦福次郎（[redacted]）
齋藤武雄（[redacted]）
鮫島初志（[redacted]）
猪股忠依（[redacted]）―歸還途中死亡
岸本理事長は延吉まで同道す

(ロ) 昭21.5.上 機械工場の若い社員約一五名が概して前項と概ね同じコースで留用された

一行中の未歸還者及歸還者氏名の判明せるもの左の通り

未者

大坪康秀　中東義人　西岡博　濱田龍雄
杉坂正信

歸者（21.9 遣送時）

大橋陸良（[redacted]）
尾家勝子（[redacted]）
中島末光（[redacted]）

(ハ) 土建協力隊として左の如く大栗子へ留用さる

昭21.5.約一〇〇名大栗子へ（隊長　佐治謙）
昭21.7.上約五〇名大栗子より二道江へ歸る（電氣、機械、醫師）関係者多し
昭21.7.上約五〇名右の交代員として大栗子へ
右により約一〇〇名が大栗子に殘つてゐることゝなるが一部逃亡し歸國してゐる

一行中の未歸還者及歸還者氏名の判明せるもの左の通り

未者

利光
中島（[redacted]）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

小熊　[redacted]
矢吹芳久（福島縣）
岩本清吾（熊本縣）

歸者

山本市蔵　河合勇助　日下由一郎
山田次郎（山梨縣）　小林鹿造
中村藤吉　佐治　譲　平田勝明

(ニ) 昭21.7.下中共軍兵工廠移動時に二分所関係者女子約十名延吉方面へ連行さる又同時頃中共軍病院勤務員として女子約一〇〇名（白城子避難者を主とし若干の社員を含む）大栗子へ留用さる

(ホ) 昭21.8.中共軍兵工廠居勤部勤務員横山某（元奉天兵器廠所長）以下技術者約五〇名大栗子へ移動す

歸者　角田　白（福山市地吹町山口嬰作所勤務）

(ヘ) 昭21.10.下中共軍退却時工作工場作業員を主力とせる約二五〇名が大栗子・臨江地區へ連行された此の一行は昭20.12.25頃大栗子に於て中共軍從軍者と北鮮逃亡組とに分れて行動し相當の人員が歸國してある（歸還者　大崎富男・田熊　某）

未者

山口　理藤太（家族一）　松永工一（家族一）
田中正夫（〃　三）　早川修治（〃　三）
原田　連（〃　三）　大戸　某（〃　一）
赤羽　某（學校・獨身）

(ト) 好資料保有者

渡邊　慈　鳥居國雄

ろ 各地の狀況

大栗子

(イ) 臨江地區より土建協力隊及技術者留用群等の移動者は前述の通りである

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

(ロ)前項移動群中より昭21.8.中奥谷實及看護婦二名、昭21.9.3看護婦六名〔佐藤、甲斐、柳等〕及昭21.10.土建協力隊六名〔山本市蔵等〕は[illegible]道江へ移動した

(ハ)昭21.6.通化より被服廠勤務として女子35名兵工廠勤務として男子約15名計50名移動し來る

歸　濱崎壽[illegible]〔煙筒溝養成所〕

杉松溝

一名〔滿崎唯喜〕は昭20.9.[illegible]致〔一名〔原田辰三〕は逃亡し不明

石人及八寶

(イ)殘留社員五〇名中左記八名〔家族を含め二十數名〕は西安炭坑に移動し現在は撫順に居る模様である

大塚傳治〔家族四名、長崎〕　村山智一〔家族四名、長崎〕

多久島勢市〔〃四名、長崎〕　中溝新〔〃三名、佐賀〕

青木巖〔〃三名、京都〕　濱崎久雄〔〃三名、福岡〕

野田[illegible]太郎〔〃二名、長崎〕　辻吉久〔歸國す、東京在住〕

(ロ)昭21.7.約一〇〇名の女子看護婦要員が臨江へ連行せられ留用された

(ハ)內地歸還途中若干の留用者が通化に殘り又患者約一〇〇名を奉天その他で殘置したが大部は歸國した筈

(ニ)醫師、宇野猛〔家族三名、四國出身〕は石人に殘留の筈

七道

昭21.3.二道江兵工廠十名留用される判明せる人名左の通り

尾崎金作　藤木正敏　今勇次郎

丸尾達實　井上トシ子　畦本[illegible]

上野義夫

(イ)通化省立病院について

中共軍に接收され東北人民自衛軍後方衛生部第二病院となり醫師、看護婦等職員は殆んど全部留用となる

個人名の判明してゐるもの左の通り

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

奥田照夫　院長醫博　於川　通化事件以後監禁され歸らず死亡？

馬場ヨシオ　内科　鹿兒島　21.7.28臨江にて別れた

稲田嘉明　産婦科　山口

寺師義正　外科　新潟　現在も殘留と考へる

中村ミキオ　化研室

鶴連太郎　醫師

池田巢　新京陸病　衛軍　21.9.内地歸還時奉天で國府側に留用

21.7.28臨江で別れた病院レントゲン技師をしてゐた

21.7.28臨江で別れた病院と同行

通化事件後監禁されて歸らず死亡したと思う（乙）

（八木喜七氏提供）

松内山喜六　醫師

潟寺村春喜　炊事夫となる

関係者立石厚

5.中共軍軍事工業部について

軍事工業部は左の二つよりなる

鑛務局：支社事務所を使用、鑛山関係の採鑛、電氣等の技術者よりなる

兵工廠：兵器関係、支社の建物を使用

后勤部：元機械工場、21.8大栗子に移動す

一分所：？

二分所：元用度倉庫　21.7延吉方面へ移動す

三分所：純鐵工場

註、21.7以降兵工廠関係は逐次移動したが工務局は兵工廠移動時に一部又は若干名が移動したが主力は二道江にありて逐次解雇となり計畫遣送時に歸還した

(4)個人資料

別冊未歸還者名簿及別送の電書（送付區分別紙第十二）の通りである

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp